みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

アラビアンナイト：ファンタジーの源流を探る

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西尾, 哲夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4799

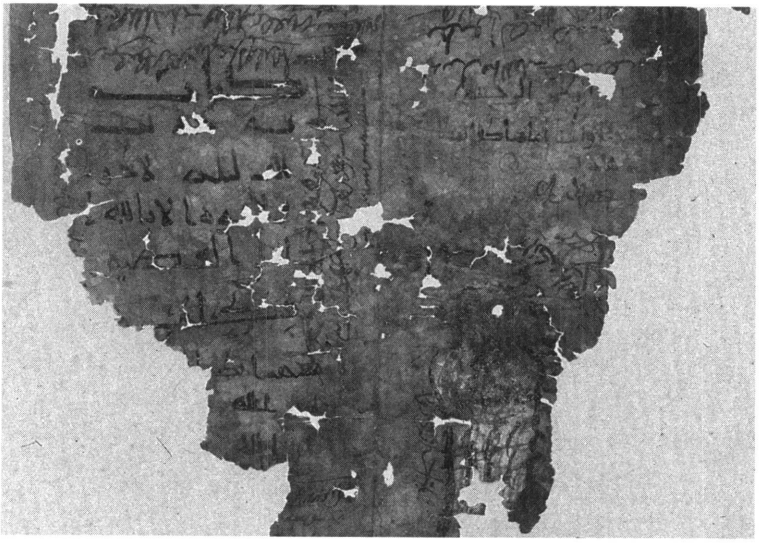
第六回　11月4日（木）放送／11月5日（金）再放送

幻のアラビアンナイト　写本事情

最古のアラビアンナイト写本

一九四七年、アメリカのシカゴ大学東洋研究所が資料三百三十一点をエジプトから入手、そのうち紙に書かれたものが六点ありました。その中にアラビアンナイトの一部が記されていた本の四ページ分に相当する二枚の紙が見つかりました。ただしアラビアンナイトに関係するものは一枚のみ、本で言うと二ページ分です。他の一ページには手紙の下書きや文章の断片などが記されており、もう一ページには文章のほかに人物像が描かれて消された痕がありました。これら二枚の紙がどういう経過をたどって一冊の本に入ったのかはわかりませんが、この時代の紙もしくはパピルスに書かれたアラビア語の文書はコーラン関連のものを別にすると非常にめずらしく、現在まで伝わったことは奇跡としか言いようがありません。

四ページ共に下半分がかなり損傷していたのですが、異なった筆跡で書かれた六種類の文



9世紀のアラビアンナイト断片（シカゴ大学東洋研究所博物館蔵）

書が記されていることがわかりました。そのうちの一つ、ヒジュラ暦二六六年サファル月、西暦にすると八七九年十月の日付のある文書が、四ページすべての余白部分に記されていましたので、アラビアンナイトの冒頭部分がこれと同時期もしくはそれよりも前に書かれたことがわかったのです。

ここに記されていたアラビアンナイトの題名は、「キターブ・フィーヒ・ハディース・アルフ・ライラ」でした。これは「千の夜の物語を含む本」という意味です。この題名から推測するに、九世紀に「千の夜」という書籍が存在したのは確かなようです。題名が記されたページの裏には、物語冒頭の十五行が記されているのですが、紙が破れていたり文字が薄くなっていたりで、完全に解読されているわけではありません。アラビア文字には

点の数によって異なる文字になるものがありますので、インクが消えていたりすると元の文字が確認できず、まるで異なった意味の単語が候補にあがってくることも多いのです。この写本を出版したアボット教授の論文にしたがうと、冒頭の十一行には以下のようなことが書かれていました。

慈悲深き慈愛あまねきアッラーの御名において。夜。そして翌晩になると、ディーナーザードが言いました。『楽しいお方、お休みでないのならお約束の話を聞かせてください。そして人の内なる美点と欠点、知恵と愚かさ、寛大と貪欲、勇気と臆病、生まれついてのものや長じて身につけたもの、人となりをあらわすものや礼儀を示すもの、シリア人やベドウィンのことを話してください』

この続きが五行分あるのですが紙がひどく破れており、わずかに数語が判読できるのみです。語り手であるシェヘラザードの名は見えないのですが、四行目には物語をうながす役であるディーナールザード（この写本ではディーナーザードと表記）の名がはっきりと記されています。ただしこの写本からは、ディーナーザードと語り手がどのような関係にあるかまではわかりません。現行のアラビアンナイトでは、ディーナールザードは語り手シェヘラザードの妹ですが、この写本に記された呼びかけの口調から推測すると、姉というよりは主人に

呼びかけているのではないかとも言われています。

ガラン写本まで——五百年のブランク

この写本に残る日付からほぼ一世紀後、十世紀の末にバグダードで書店を開いていたイブン・アンナディームが「千の物語」（原題は「ハザール・アフサーン」）という物語集の内容を記録に残しました。イブン・アンナディームによると「千の物語」には王の召使頭であるディーナールザードが登場し、一夜妻を殺してしまう王のもとに嫁いだ王族の娘シャフラーザードに向かって、物語をしてくれるようにと頼んでいます。やがてシャフラーザードの賢さに感動した王は、それまでの行いを悔い改めることになったのでした。

この「千の物語」が「千の夜」つまり「アルフ・ライラ」と同じ物語集であったらしきことは、イブン・アンナディームよりも少し前の文人マスウーディーの記録に出てきます。マスウーディーは「ペルシア語で千の物語と呼ばれる物語集がある。これをアラビア語に訳したものがアルフ・フラーファ（「千の愉快な物語」）であり、一般にはアルフ・ライラの名で呼ばれている」と記しているのです。

ところがこの九世紀の断片、マスウーディーとイブン・アンナディームの記録を別にすると、中世から近世にかけてアラビアンナイトがどのような形で受け継がれていったのかは、ほとんどわかっていません。少なくとも現在確認されている限りでは、九世紀の断片の次に

現れるアラビアンナイト写本は、ガランが翻訳に用いたいわゆるガラン写本なのです。

ガラン写本の作成年代はよくわかっていないのですが、作中にあらわれた通貨単位などから判断すると、十五世紀の半ばにまとめられたもののようですから、九世紀の断片から数えると五百年以上のブランクがあることになります。両者をつなぐミッシング・リンクとなる幻の写本が見つからない限り、九世紀の「アルフ・ライラ」とガラン写本の関係は推測するしかないのです。

ただし、写本以外の文献資料に目を向けると、中世にアラビアンナイトらしき物語集が存在したことは確かなようです。ゲニザ文書の研究では、十二世紀の書店主が記した貸し出し記録の中に「アルフ・ライラ・ワ・ライラ」という現行題名と同じものが確認されました。ゲニザとは、ユダヤ教のシナゴーグに置かれた文書保存庫のことです。中世のユダヤ人は、神の名が書かれた（もしくは書いてあるかもしれない）紙をゲニザに保管していました。その多くは宗教関連のものですが、個人的な書簡、証文、契約書などありとあらゆる種類の文書が確認されています。

十九世紀末、旧カイロにあったシナゴーグのゲニザから、大量の文書が発見されました。この「カイロ・ゲニザ」を社会史的な観点から研究したゴイテインが、十二世紀のカイロで医者をやっていた人物の書籍貸し出し記録の中に「アルフ・ライラ・ワ・ライラ」という書名を見つけたのです。中世カイロのユダヤ人はヘブライ文字を使ってアラビア語を表記して

いましたから、この題名もヘブライ文字で書かれていました。それまでは「アルフ・ライラ」という題名しか確認できなかったのですが、十二世紀には「アルフ・ライラ・ワ・ライラ」すなわち「千一夜」という書籍が存在したことがわかったのです。

残念ながら、ここで借り出された「アルフ・ライラ・ワ・ライラ」にどのような話が入っていたのかまでは、わかっていません。このようにアラビアンナイトの写本はもちろん、この物語集にかかわる記録はひどく乏しいのですが、その理由については後の回で確認してみましょう。

ナポレオンのエジプト遠征

ガラン版アラビアンナイトが出版されてほぼ百年後、ナポレオン・ボナパルト（一七六九～一八二一）率いるフランス軍がエジプトに侵攻しました。いわゆるエジプト遠征です。エジプト遠征の動機に関してはさまざまな議論がありますが、フランスでは大革命以前からエジプトの植民地化が検討されていました。遠征軍はエジプトの植民地化には失敗したものの、この遠征で発見されたロゼッタストーンはヒエログリフ解読のきっかけとなり、遠征に同行した学術調査団の報告書は膨大な『エジプト誌』となって結実しました。それと同時にこのエジプト遠征は、アラビアンナイトをめぐる文明史においても歴史的分水嶺の役割を果たしたのです。

エジプト側にしてみれば、この遠征は浦賀沖に出現した黒船どころの騒ぎではなかったと思われます。近代装備を備えたフランス軍は、精強をほこるマムルーク騎兵軍団を打ちのめしてカイロに入城すると、やつぎばやに「近代的な」行政改革を推進しました。エジプト遠征に関しては、学術調査団に参加していた専門家や従軍した一般兵士が数多くの記録を残しています。後にルーブル美術館の初代館長となるドゥノン（一七四七～一八二五）も遠征に参加し、上エジプト方面に向かった遠征軍の別働隊に同行して『エジプト旅行記』をまとめています。

アラブ側の資料は少ないのですが、当代の第一級知識人であった歴史家ジャバルティー（一七五三～一八二五）がエジプト遠征を詳細に記録しています。ジャバルティーは、マムルーク軍団のふがいなさを批判するとともに、フランス軍の熱意を褒め称え、「彼らはイスラーム初期の軍隊のようだった」と述べています。また彼は、フランス軍がカイロに設置したエジプト学士院の図書室を何度も訪れました。

……フランス人が見せてくれたさまざまな書籍の中には大きな本があって、そこには預言者（ムハンマド）の生涯も描かれていた。彼らは知識と理解のおよぶ範囲で預言者の高貴な肖像を描いていた……諸地方、海岸線、海、ピラミッド、レリーフや碑文とともに描かれた上エジプトの古代遺跡、各地の動物、鳥、植物、薬草。何とコーランまで翻

ナポレオンのエジプト遠征に参加したドゥノン。長谷川哲也『ナポレオン―獅子の時代』（少年画報社）より　© 長谷川哲也

訳されていた。……コーランの章をいくつか暗記しているフランス人もいた。彼らは数学や言語に格別の関心を抱いており、アラビア語や日常会話の表現を熱心に学び、昼も夜も研鑽にはげんでいた……また天文学用につくられた見事な機器や、標高を測量する器具を持っていた。天体観測のための望遠鏡、距離、大きさ、高さを測る機械、水時計、秒針をそなえた時計などのほか、ありとあらゆる種類のすばらしい器具があった。

ジャバルティーの記録からは、学術調査団のメンバーが、生きたエジプト情報を憑かれたように求めるようすがうかがえます。アラジンのアラビア語写本を偽造したサッ

バーグは、この遠征を機にフランスに渡りました。彼がパリの東洋学界で活躍できたのは、古典アラビア語と日常で用いられるアラビア語の双方に通じていたからです。アラビア語は書き言葉（古典アラビア語）と話し言葉（口語アラビア語）の違いが大きく、古典文法を学んだだけでは話が通じず、話し言葉ができるだけではきちんとした文書が作れません。カイロ市民に向けて発したフランス軍の布告文が間違いだらけだったのはこのためでした。逆にパリに渡ったサッバーグのもとには、アラビア語の口語表現について質問してくる人が後を絶たなかったそうです。

本格的な植民地時代を目前にしたこの時代には、現実的かつ具体的な中東情報が組織的に蓄積されていきました。エジプト遠征を境として中東世界は植民地として支配すべき対象となり、中東研究は国家戦略に直結していったのです。

写本争奪戦

先にお話ししたように、ガラン版アラビアンナイト以前に作られたアラビアンナイト写本は、冒頭の十数行しか残っていない九世紀の断片と十五世紀半ばの成立と思われるガラン写本の二つが知られているにすぎません。ガラン写本を写したと思われる写本、あるいはガラン写本よりも少し遅れて成立したアラビアンナイト写本はいくつか知られていますが、ガラン版アラビアンナイトが出版された後に成立した写本は、これらとは比較にならないくらい

に数が多いのです。その理由としては、やはりガラン版アラビアンナイトがベストセラーになったことが第一に挙げられるでしょう。というわけで、ガラン版アラビアンナイト以後に作られた写本には、来歴がよくわからないものもあります。

とは言っても写本の場合、作成年代が新しいものの中に古い伝承が復活していることもあります。つまり近世になって作られた写本の中に、今では伝わっていない古い写本、もしくはその断片が写されている可能性もありますから、新しい時代の写本だからと言っていちがいに切り捨てるわけにはいきません。

また、この時期のヨーロッパではナショナリズムを背景とする写本クエスト（探索）もありました。ガラン版を擁するフランスは、ガラン写本こそが正統的なアラビアンナイト写本であるという立場にこだわり、イギリスは独自に真正のアラビアンナイト写本を発見しようとした観があります。それまでイギリスで読まれていたアラビアンナイトはガラン版を英訳したものでしたし、ガラン版には故意の削除や変更がありましたから、イギリスの東洋学者たちはガラン版とは異なるアラビアンナイトを自分たちの手で作ろうとしたのです。

さて、ガラン版アラビアンナイトには二百数十夜分の物語しか入っていなかったため、写本クエストには熱が入りました。このような写本の探索は十八世紀ころから盛んになっていきますが、国家の威信がからんでくると、錯綜した状況も出てきました。たとえばエジプト遠征と時期を同じくしてオーストリアの東洋学者が、アラビアンナイトの結末が記された写

本をエジプトで手に入れました。アラビアンナイトの結末に関しては、ガラン写本よりも少し遅れて成立したらしい別写本にも記されているのですが、ヨーロッパ人が発見したものとしてはこれが最初のものでした。ところがこれを訳した原稿を当代一の名が高かったフランスの東洋学者に届けたところ、その原稿はいつの間にか行方知れずになってしまったのです。また、千一夜分がそろったアラビアンナイトを完成させようとするあまり、素性のあやしい、もしくは存在すらしない写本に頼ってしまった場合もありました。

一方、中東でもヨーロッパ人の写本収集熱に呼応する動きがあらわれました。当時は、「アルフ・ライラ・ワ・ライラ！」と叫びながらカイロの市街を歩けば、あっという間に目当てのものを手に入れることができるという噂話まであったようです。十九世紀初期にヨーロッパや中東を広く旅行したエドワード・クラークは、「アラビアンナイトとは、各自の好みや筆記者の便宜、注文主の意向にそってまとめられたものであり、同じ内容の写本は二つと存在しない」という意味のことを述べています。

膨張する物語

ヨーロッパの写本探索と並行してシリアやエジプトなどでは、当時知られていた物語をまとめようとする動きが出てきました。先ほど名を挙げたドゥノンの回想録にはアラブ人の語り手が話す物語に時を忘れて聞き入ったことが記されています。ただしドゥノンが耳にした

物語は、現在のアラビアンナイトには入っていない話でしたし、近世以後の編集で集められた数多くの物語にしても、九世紀ころにバグダードで成立したらしい物語群と直接的なつながりがあるわけではありません。

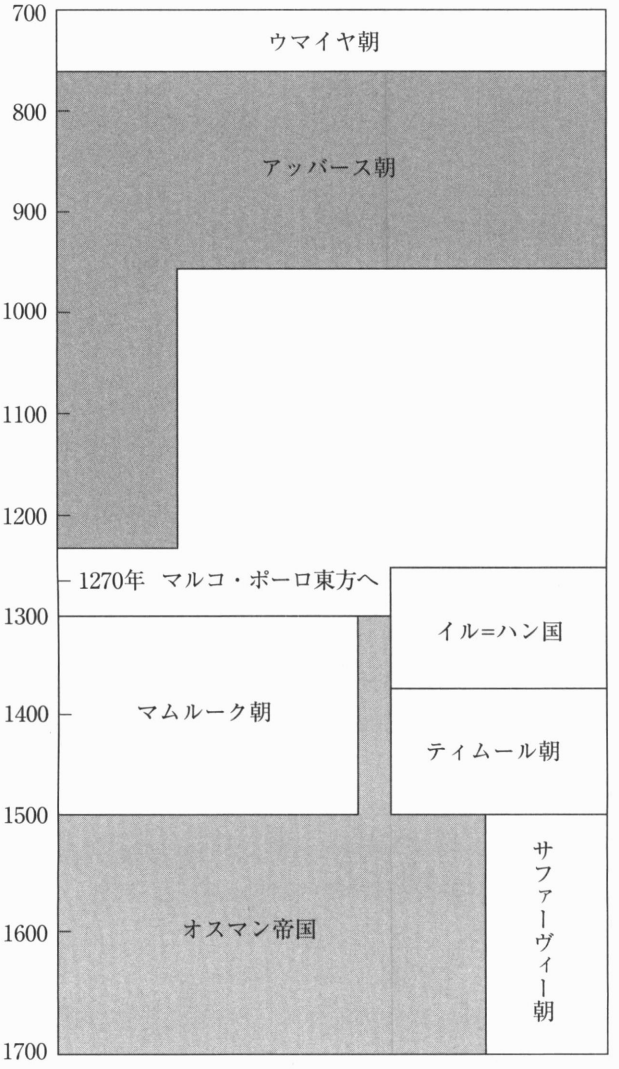
ガラン写本に含まれていた初期の物語は、何らかの文学的意図にそって編集された形跡があるのですが、近世以後の編集作業にはそのような一貫性が見られません。現在のアラビアンナイトが全体として、あれもこれもをつめこんだ「中東不思議話集大成」のような体裁になっているのは、このような理由によるものだと言えるでしょう。

フランス遠征軍がエジプトから撤退（一八〇一）すると、近代エジプトの祖とされるムハンマド・アリーが政権を掌握して積極的な近代化政策を推進し、カイロ近郊のブーラーク（現在はカイロ市内）に官立の印刷所を開きました。この印刷所では官製新聞や行政文書などが印刷されましたが、アラブの古典文学も次々と出版されました。その中にはアラビアンナイトも入っており、ブーラーク版の名で呼ばれています。官立印刷所が大衆文学であるアラビアンナイトを印刷するなどという事態は、ヨーロッパでアラビアンナイトがベストセラーにならなければあり得ないことでした。

ブーラーク版のもとになったのは、十七世紀後期から十八世紀初期にかけてエジプトでまとめられた写本群です。これよりも少し後、十九世紀初期に中東を訪れたドイツ人探検家が、カイロで名の知られた長老がアラビアンナイト完本の編集を手がけていたという記録を残し

ています。中心となるのは二百夜ほどの物語でしたが、ここにさまざまな文学資料や民間説話を追加して完本としたようです。このときにまとめられた完本がブーラーク版の基礎となったのではないかと思われます。ブーラーク版はガラン写本に収録されていた話に、新たに二百あまりの話が追加されてできあがったものです。ここで追加された話の大半は、バグダードで成立したとされる初期の物語とは何の関係もないにもかかわらず、便宜的にアラビアンナイトの名のもとにまとめられたというにすぎません。ただしこのような増量作戦はそれ以前の写本編集時にもありましたし、ガラン版にもありました。

バートン版や東洋文庫版の底本となったカルカッタ第二版には、ブーラーク版とほぼ同じ内容の話が含まれています。バートン版ではカルカッタ第二版だけではなく、その他の刊本や写本も訳出されており、結果として今までにまとめられたアラビアンナイトとしては最長のものになりました。ただしバートンが訳出した話の中には、存在しない写本をもとにした刊本に含まれていた話や、別の物語集からとってきたものも入っています。

このようにアラビアンナイトには、正典と特定できるような定本は存在しないのです。九～十世紀のバグダードで原型ができたことは確かだと思われますが、それ以後は千年をかけて次々と大小の物語を飲みこみ、際限なく膨張してきたのです。そして東西の文明が触れあうことにより、巨大化がさらに促進されました。アラビアンナイトは今もなお成長を続けており、日々、物語をとりこんで加工しては新しい話を生み出しているのです。

8～18世紀（中世・近世）の西アジア史概略図